

の作例に對しては殊更深い注意が向けられてゐる。この畫の著しき點は、(1)筆意を籠めた輪廓線を以て畫いてゐること、(2)明暗を畫かなかつたこと、(3)及び視點の移動の無いこと、等の三つにありとし、此等に就いて詳細に論じて居られる。

さて此の支那山水畫史で議論の中心を爲すのは顧愷之、王維、荆浩等の山水畫である。従つて此等の人々の作品に對しては最も精密な觀察をされて居り、構圖、輪廓線、渲染の法等に對して興味ある研究をされてゐる。例へば輪廓線について云ふ。顧氏の女史箴圖中の山水圖にあつては、その輪廓線は皆一樣の太さ、同じ調子で、流麗暢達ではあるが、何等肥瘠の變化なく、對象によつての區別もなく、陰陽向背の相違も、遠近上の相違も無い。この線の單調さが畫に現實性を失はしてゐる一因となつて居る。王維の江山雪霽圖を見るに、此處に用ひられた細い柔かい線は大體に於て古來の法に従つて居り、顧氏の線によく似てゐる。而して精密に觀察すると、幾分その線には肥瘠の變化あり、筆意を表してゐる。この線の肥瘠の變化は波動的であり、音樂的旋律を有する。王維の詩韻高き山水畫はその構圖にもよるが、他方これに用ひられた線にも依る。彼の使用した線を三つに分けて考へる。(一)可なり筆意を表した山石の描線、(二)殆んど筆意の無い枯樹家屋に用ひられたもの、(三)は前二者と全く異なる遠樹に見られる描線である、とし一々について微細に論究せられてゐる。荆浩は「秋山瑞靄圖」に見る様に太い短線を用ひてゐる。しかし對象のそれぞれに應じて、それぞれの筆意を示してゐる。これは樹石に最も顯著で、近景のそれには最も著しく、遠景になるに従つて線自身の太さの度を減じてゆく。其處には何等の音樂的諧調も、絶ゆることを知らぬ生命の抑揚も無い。唯箇々の對象の要求する小忙しき筆意とその線の斷續がある。従つて斯様な線で構成せられた畫面には意外に現實性が溢れてゐると氏は言はれてゐる。

以上で内容の紹介を了へ、次に一二本書に對する希望を述べると先づ氏の用ひられた作例に關する點でこれに就いては各人各様の意見があるに相違ない。それは兎も角として、純然たる山水畫を構成せぬものでも支那上代山水畫史の

研究に必ずや參考になるもので時代的に可なり確實なものが斷片的に存するが、それらに注意が向けられないのを残念に思ふ。本論文には南宗北宗の研究をも織込まれて居るが、それに附帶して山水畫に於ける用墨の法の變化發展の研究をなされたならば尙一層興味深い結果を齎したのではないかと思はれる。

終りに範圍廣汎なかかる研究を體系化せられ、その成果として此の書を世に問はれたのを氏の蘊蓄と努力を外にしては有り得ざることと思ひ、深く敬意を表し妄評を謝する次第である。(西村)

四六倍判 本文一八〇頁 挿圖玻璃版一三圖 東方文化學院京都研究所研究報告第五冊 昭和九年三月

同附圖四〇種 横三一種 和裝帙入 四切玻璃版四十七圖

東寺の研究

今春四月中に東寺に於て行はれたる弘法大師千百年の遠忌と、之に因んで恩賜京都博物館に開催せられたる東寺名寶展覽會とを機縁として編纂せられたる一書である。收むるところは

教王護國寺の建築

東寺の彫刻雜考

東寺講堂の諸像に就いて

東寺百合文書に就いて

東寺の彫刻に就いて

弘法大師と東寺

天沼俊一
藤原義一

小林剛

小野玄妙

赤松俊秀

明珍恒男

山本忍梁

の六論文である。うち美術に關するものについて云へば、天沼藤原氏の論説は寺塔の沿革に始めて諸建築の一々の細部に至るまでの懇切なる解説を試みられたものである。一般讀者に對する好箇の手引であると共に、研究者にとつても一々の圖形を伴はざる憾はあつても綿密なる調査として利便が尠くない。彫刻に關する三つの論文は三氏のそれぞれの専門的立場からの考察である。即ち小

林氏は一般彫刻史上から、小野氏は儀軌を主とする立場から、明珍氏は實査的な立場からの所言であつて何れも耳を傾けしむるものがあり、相俟つて東寺の諸彫刻の全般的意義を明かならしむるものである。

本書に東寺の繪畫に關する論説を載せなかつたのは、事情は知らず、恐らく編纂者自身の遺憾としてゐる所であらうと思ふ。更に望むならば工藝について、また今次の名寶展覽會を機として始めて公開せられたる諸文書について知るところありたい。唯本書の編纂の目的は之等凡てについての用意ある論叢であるよりも、差當つての機會に對するよき手引を作るにあつたのであらう。その意味に於ては十分にその役目を果し得てゐる。(渡邊)

菊判假綴 口繪網目版五十七圖 本文一二八頁 昭和九年四月一日洛東社發行 頒價二圓

文人畫の發生 (東方學報 京都第四冊)

伊勢專一郎

氏は文人畫の發生を論するに當り、舊來の一般的な考へ方に依り、先づ支那山水畫史の概要を系統的に考へる。即ち五代荆浩に至つて白描山水は大成するといひ、荆浩以後の山水畫に南北二宗の對立が生ずるといふ。宋元時代に至つて北畫が次第に類型化の弊に陥つてゆく時に當り、南畫はそれを畫く者が自然に於ける自己の感懷を中心對象としてゆく爲漸次發展に向ひ、元期になつて四大家等を得て全く破格的なり、以後甚だ流行するが、この種の南畫を明代以後文人畫と呼ぶ。

文人畫の典型的なるものは元季四大家の畫であり、四大家は直接南畫から出るものと考へられるから、文人畫は南畫より出づるものともいへる。此の發生の遠き起原を考ふると明の董其昌の言ふ如く唐の王維に存するとも言つてよい。この點に限つて董其昌の説に贊同してゐる。

氏は文人畫の概念を規定する爲にその特殊性を考へ、その畫は氣韻高きこと及び、素人的なるを要すとし、此の二の特色を擧げてこれを詳細に論じ、これ

に依つて文人畫の南畫より出ざるを得なかつた經路を述べてゐる。

此の論文に存する特色は以上の議論よりも寧ろ董其昌の南北二宗の議論及び文人畫論の再吟味とそれらの訂正に存する。即ち董氏が荆浩以前に南北二宗の對立を考ふるは史實に非ずとし、又文人畫の起原を王維と考ふるのはいが、王維以後の文人畫に董源巨然と共に李成范寬を加へてゐるのは議論の粗雜を來してゐるとして董氏のこの二つの議論を訂正してゐる。

さて本論文を文人畫の特に發生論として見る時は、多少董其昌を中心とする文人畫の概念整理と思はるゝ點に觸るる事多く、元明に於ける文人畫の發生其自體の窮明に力を用ひらるることが尠い様に思はれて、讀者をして問題の性質の把握に困難ならしめてゐる感がある。かかる望蜀の嘆は姑らく措いて本論文の所説は更に氏の支那山水畫史の一研究として聽くべきものが多いであらう。

(西村)

美術研究所時報

美術懇話會五月例會は十二日美術研究所に於て開催、主として西洋近代繪畫素描、彫刻約六十點を諸家より借用して展觀し、兒島喜久雄氏の陳列品に就ての講話を聽いた。尙翌十三日この展觀を公開した。

寄贈新刊圖書

- | | |
|-----------------------------|-------------|
| 秦漢瓦磚集錄 中村不折著 | 著者 |
| 自顧愷之至荆浩 支那山水畫史及附圖 伊勢專一郎著 | 東方文化學院京都研究所 |
| 遼金時代ノ建築ト其佛像 關野貞編 圖版上冊 竹島卓一編 | 東方文化學院東京研究所 |
| 帝室博物館圖錄 四ノ二 | 帝室博物館 |
| 小出楢重素畫集 橋本基編 | 編輯者 |
| 唐宋元明 人名辭書續篇 訂正 中山梨軒著 | 著者 |
| 清書畫家 | |